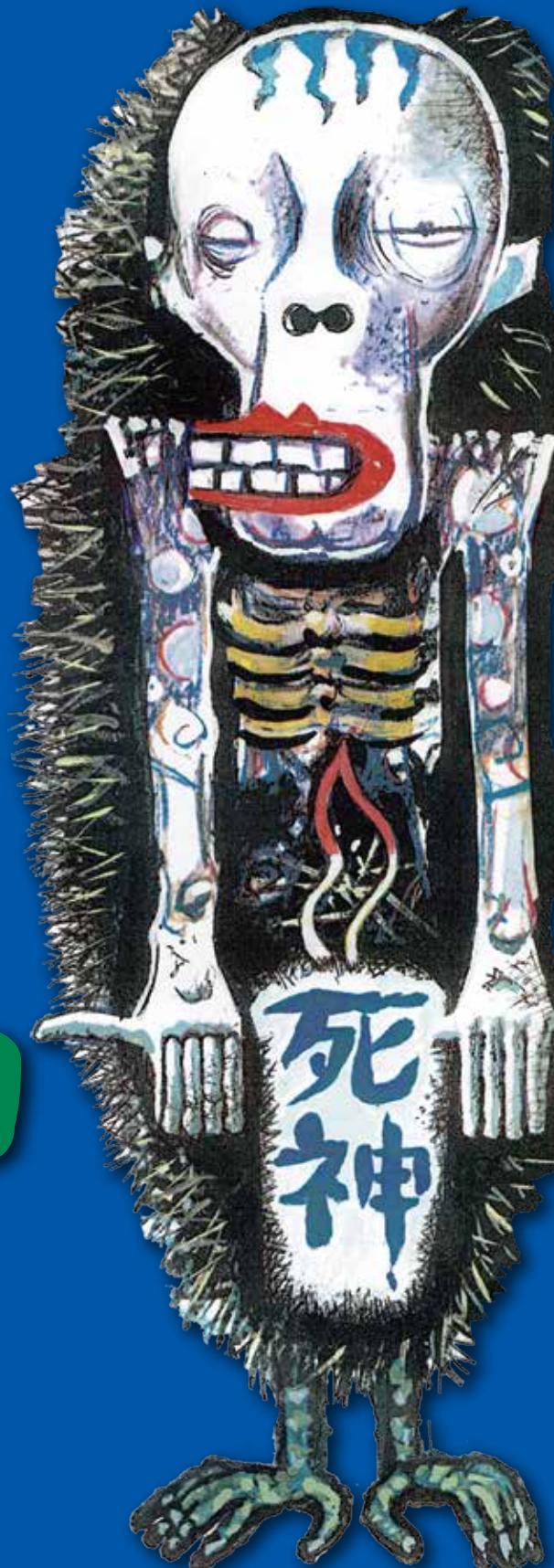


死 外 神



古典落語より

高学年・大人向け 体育館・小会場用上演作品
「死神」

上演時間 1時間 (休憩なし)
構成 キャスト4名 スタッフ1名 / 計5名
運搬 2t トラック 1台 / 2名
公共交通機関利用 2名
諸経費 (上演料+交通費+車両経費+宿泊費)+宣伝材料費

お申込み・お問合せ

人形劇団プーク **03(3370)3371** | **FAX** 03(3370)5120
〒151-0053 渋谷区代々木2-12-3 | ホームページ [https://www.puk.jp](http://www.puk.jp)
Eメール puppet@puk.jp

ーあの有名な古典落語の世界を へんてこ、怖くて、可笑しな人形芝居にー



〈アンケートより〉

*最後はぞつとしました。面白かったです。(竹野さん)

*見入ってしまいました。戯曲的でとても楽しかったです。欲に対しての人間の感情を、皮肉に込めた作品だと思いました。

演技などとても軽妙で、自分の中に入ってきた感じで良かったです。

*ブラックユーモアな落ちが人形だからみていられる、笑える。「死」に関することは案外人形劇向きなテーマかもしれない。

顔の左右で表情が異なる人形が表現力豊かで、面白かったです。回り舞台というのも、高さがありそのまま座敷になったり長屋になったり、回す早さが自由自在なのも舞台が広がった感じがした。(大多和さん)



*人の本性をうまくディフォルメした魅力的な造形の人形と軽快な動き、ウィットに富んだ科白で大笑いました。人形劇はなんとなく子ども向けという先入観がありました。操る方の熟練の技に感嘆いたしました。(西山さん)

*死神の造形とキャラクターが、とても落語の雰囲気が出ていて良かったです。アフリカの彫刻のような見た目でしたが、なぜかはまっていました。主人公のピカソの絵のような顔は角度によって違った表情で印象的でした。(古市さん)

古典落語より



脚色・演出／柴崎喜彦 美術／宮本忠夫 装置／児玉真理
音楽／高橋久美子(日本音楽集団) 照明／阿部千賀子
音響効果／吉川安志 江戸言葉指導／八光亭春輔

古典落語で有名な「死神」の世界を人形芝居にー。
人間の欲望は限りなく、いつの世もお金にまつわる諸々は喜劇を生み、悲劇を生み…。

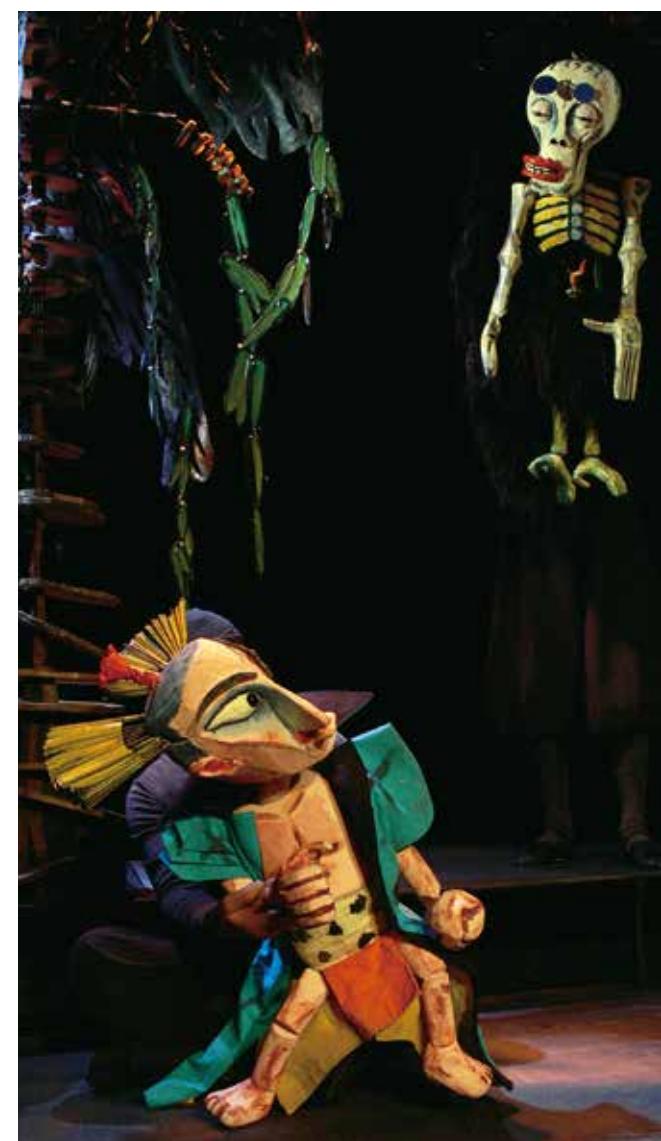
懸命にそれでいて不器用に生きる人間たちを、大胆な造形でディフォルメ。その人形たちにさらに動きの制限を付けた。より不器用に舞台で生きる人形たちが繰り広げる、怖くて滑稽な人形芝居をお楽しみ下さい。

～ものがたり～

「ついてねえ、ついてねえ…」と賭け事にあけくれる貧乏薄幸の男のところへ、ひょんなことに死神が現れた。

「おめえさん、医者になってみねえか?…。」

男は、死に取り憑かれた重病人たちを言われたとおり治していく、瞬く間に大金持ちへ。生活は一変し、横柄厚顔無恥へと変貌します。やがて金も全て失った男は、もう一度死神の元へ…。そこで死神がはなった言葉は…。



運と不器用と幸せと…

演出 柴崎喜彦

時折思う。人生というものは、シナリオに縛られていて、あがいたところで運を持っている奴には敵わないのではないか。持てる奴は幸せに、持てない奴はそれなりに…。仏教では、「縁起」ということを説き、例えば現在の幸、不幸は、過去世ある

いは現世での良い悪い行ないの結果だと解される。人生は因果律によって支配され、努力やあがきはどうしようもないもの…。運を“持てない”ものは、幸せにはなれないのだろうか…。

人間は不器用だ。生きることも死ぬことも、自分の意思だけでは自由にいかないこともある。同じく不器用な人形たち。自分の意志では1ミリも動けない。だからこそ、そんな人形たちで不器用な人間たちを描いていきたい。軽妙に、ユーモラスに。人形たちの多様に変わらぬ表情が、舞台の上ではきっと心の動きを魅せてくれる。“持つ”いなくともあがいた人間模様を魅せてくれる。

人は、何をもって幸せなのか…。“幸せ”を絶えず望み、あがき、努力する。多分、そのあがいたことも人生にとって幸せになり得るのだろう。生きるバイタリティー、生きていこうという意志、それが人の“幸せ”につながっていると信じている。

